

た ち ば な 新 聞

発行所 宝清寺
〒197-0821
東京都あきる野市小川101
電話 042-558-2663

春彼岸会 十七日(水)から二十三日(火)

お彼岸にはコロナの感染に配慮し、墓参されるようお勧め致します。

コロナ禍のお墓参りの統計が出され、回数に「変化なし」が六十八%、「増えた」が五・八%、「減った」が二十六・二%の結果だったようです。当山では、平日・休日を問わず、早朝や夕方にも「密」を避けて、本堂にお参りし、墓参される方が目立ちました。彼岸の時期が参りました。彼岸は春分と秋分を中心として七日間が設けられています。通俗的には、中日は先祖に感謝し、残りの六日は六波羅蜜(布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧)という修行の段階を一日にひとつずつ修行するものだと言われています。彼岸(あちら岸)とは悟りの境地や極楽浄土を表し、此岸(生死から解脱しない、この世の世界)から目指すところとされています。思えば、彼岸に至るまでの道のりは修行ですから、厳しく辛いものだと思います。けれども人生が彼岸に至るまでの修行そのものだと思えると、少し見方が変わってきます。

住職ひと口法話 第六十四回

六四三四人が亡くなった阪神・淡路大震災から一月十七日で二十六年を迎え、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が兵庫県も出るなか、来場者の「密」を避けるため例年より半日早い、地震発生時刻の十二時間前の午後五時四十六分、「がんばろう」の文字を並べた約八千本の灯籠が灯され、訪れた人達が手を合わせて祈りを捧げました。阪神・淡路大震災の「大難」に、被災地で活動したボランティアの延べ人数は四八〇万人にのぼり、「ボランティア元年」と呼ばれ、がれきの片付けや炊き出しなど、被災地の復興・整備が定着する契機となりました。

だがいま、コロナ禍で人の移動は制限され長期化する中、先行き不透明な日々が続く、精神的に不安定になる人が増えている危機的状況を乗り切るためには、献身的な医療従事者に感謝し、支援のあり方を見直すだけでは、早い

宝清寺の年中行事

二月節分	厄除け・星祭
三月彼岸中日	彼岸塔婆供養
四月八日	花まつり(灌仏会)
四月八日	オリエンテンプリンダ
七月十七日	お盆塔婆供養
七月十七日	施餓鬼法要
九月彼岸中日	彼岸塔婆供養
十月十二日	お仏式法要
十二月初旬	お盆金締札



ひとりで黙々と彼岸を目指すのではなく、家族皆で生命を繋いでいくために、家族が支え合い繋がりの中で一步一步、泣き笑いしながら彼岸を目指して日々の生活を送るのです。お彼岸に墓参し、ご先祖に感謝し、六波羅蜜の修行をする事は、人生を送る私たちの日々の生活であり、彼岸の行事は日本古来の風習なのです。お彼岸にはご先祖への感謝と、日々の家内安全の気持ちで墓参致しましょう。

終息は臨めないと思えます。そこで、我々が精神的に不安定な状況に陥らないためには、個人個人の意識と自覚が大切だと思います。それを育てるには「自己肯定感」を高め、「自分自身を戒めることば」を持つことです。

三菱の創始者、岩崎弥太郎には、今でも三菱の社訓として大切に守られている「岩崎家の家訓」があったように、「自訓(戒めのことば)」を作ってみることで

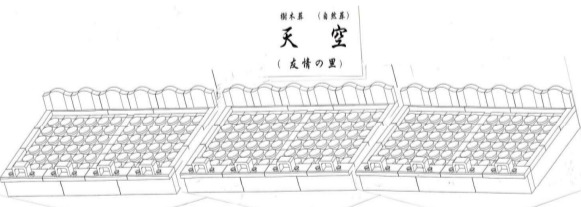
たとえば、『①(連日のようにコロナのニュースが放映されているが)すべてに落ち着いて行動したか、②(マスクの着用・手洗いなど)約束は守ったか、③(コロナに影響されることなく)楽しく仕事をしたか』です。こんな簡単なことでも完璧にやり遂げることは難しいと思います。

自分自身の「人生哲学を持つことが危機的大難を乗り越える秘訣であるばかりではなく、困難の多い人生に必要なことではないでしょうか。

特選区に樹木葬

墓地「天空」完成

多くの皆様から「樹木葬の墓」についてのお問い合わせがあり、希望者も多数ありましたので、令和三年春彼岸の販売に向けて、樹木葬墓地(自然葬)「天空(友情の郷)」を橘墓苑特選区内に建設する運びとなりました。総区画数は二百十六区画で、三期に分けて着工致します。



今回は、上図面の左側の一期七十二区画の販売を開始致します。他霊園では一区画に一霊の埋葬が一般的ですが、当山の樹木葬墓地は四霊まで埋葬が可能です。

慶讃事業浄財勧募のご報告

令和三年二月十六日は日蓮大聖人の降誕八〇〇年にあたり、慶讃事業として浄財勧募の協力をお願いしたところ、多数の方から奉納頂きました。その都度、私たちは新聞にご芳名を掲載させて頂き、感謝の気持ちを表して参りました。最終の勧募のご案内にご協力頂いた方々のご芳名を報告させて頂きます。

秋山俊恭様、阿部優様、石郷岡秀子様、井上浩史様、岩佐扇靖様、黒宮稔子様、五味俊子様、下山富士子様、高木洋子様、高野重成様、林豊様、原芳子様、藤野暁海様、古川榮一様、矢崎茂夫様、米山清人様、渡部貞良様、の方々です。

皆様からお寄せ頂きました浄財は、宗門に納めさせて頂きました。ご協力ありがとうございました。

管理料納入のお願い

たちばな墓苑の管理料令和三年度分(二〇二一年四月一日より二〇二二年三月末日)納入のご案内を申し上げます。当寺の管理料は、翌年分を毎年三月末日までに納入していただく前納制です。納入方法は、ご持参もしくはお振込でも可能です。お振込の方は左記の口座にお願い致します。

銀行名 多摩信用金庫 秋川支店
普通預金 口座番号 一五一六二四九

受取人 宗教法人宝清寺 代表役員 石井前琮
令和二年度分管理料が未納の方は、早めにお納め頂きますようお願い申し上げます。

法華経と私たち

第九回

化城喻品第七之二

また十二因縁を説いて曰く「無明は、行に縁たり。行は、識に縁たり。識は、名色に縁たり。名色は、六入に縁たり。六入は、触に縁たり。触は、受に縁たり。受は、愛に縁たり。愛は、取に縁たり。取は、有に縁たり。有は、生に縁たり。生は、老・死・憂・悲・苦・悩に縁たり。無明滅すれば、すなわち行滅す。行滅すれば、すなわち識滅す。識滅すれば、すなわち名色滅す。名色滅すれば、すなわち六入滅す。六入滅すれば、すなわち触滅す。触滅すれば、すなわち受滅す。受滅すれば、すなわち愛滅す。愛滅すれば、すなわち取滅す。取滅すれば、すなわち有滅す。有滅すれば、すなわち生

滅す。生滅すれば、すなわち老・死・憂・悲・苦・悩滅すなり。」仏がこの法を説いたとき六千万億の人々は、自在な能力を得て、諸々の苦より解脱し、阿羅漢あらかんとなった。その時、十六人の王子は童子だったので、出家して沙弥しゃみとなった。大通智勝如来は、沙弥達の要請を受けて、法華経を説いた。十六人の沙弥達は聡明で知恵が備わっており、皆よく聞き、記憶し、理解した。大通智勝如来は、大衆に、「この十六人の沙弥達は、希有な菩薩である。よくこの沙弥達の説くところを信じ、受けとめれば阿耨多羅三藐三菩提あうたらかんみやくさんぼだいの如来の知恵を得るだろう。」と告げた。釈尊は僧達に「たとえ、人跡未踏の荒野があるとす。悪路を大勢の人たちが、宝を求めて歩いて行

くと、道は険しく、人々は途中で、疲れた、これ以上歩けない、前途は遠い引き返そうと不平を言い始める。道案内人は、このままでは宝のところまで行けないと判断し、方便を使って一行を導こうとした。すなわち神通力で、道の途中に城を作って一行に言った。あそこに城がある、ゆっくり休んでいこう、一行は大いに喜んで、そこに止宿した。道案内人は人々が元気を回復したのを見計らって、城を消滅させて言った。諸君、宝の場所へ向かって歩き出した。僧たちよ、如来も衆生の道案内となり、生死・煩惱の悪路を通り過ぎなければならぬ。仏道ははるか遠い、久しく苦しい道のりを歩いて行かなければ到達できない。仏も方便をもって、声聞乗と独覚乗を設けて説くのである。」と語った。

私は、フランスのスイスとの国境に程近いフェルネ・ヴォルテールという街に、二十年ほど在住し、フランスやスイスの文化の中で過ごしてきました。切り絵に魅了されたのは二〇〇〇年のことです。ジュネーヴの近くの街に引っ越してきたばかりで、お友達を探していました。ジュネーヴにある日本食品店に張り紙をして、「メル友募集！」とメモを貼っておいたら、今も仲の良い美佳ちゃんと呼び合いました。美佳ちゃんは、「私こんな趣味しているの」と、黒いシルエットの絵を表は黒、裏は白い折り紙の黒い紙のようなものにカーボン紙で絵を写し、ハサミで切り絵をしていたのです。それを日菜ちゃんもやってみないかと誘ってくれたのが始まりです。昔から絵を描くのが好きだった私は、自分で描こう！と、好き勝手に妖精の絵を描いてみました。普通にペンで細い線で描き、描き終わると「よし！切るぞ！」と、焦りました。最初から細かすぎた・・・と、焦りました。挫折することなく、一つ一つ完成させたのが今の私に至ります。その時の達成感は今までに体験したことがありません。そこから私は夢中になって大作を生んでいったのです。二〇〇五年には、世界最古の展覧会と言われモネやゴッホの登竜門ともなった『ル・サロン・デ・フランス』という展覧会に出展(左写真)。

評価をいただきました。二〇〇六年、二〇〇七年にはカンヌの国際展覧会で金メダル。フランスのアート連合の主催する展覧会で次々に賞をいただきました。世界的な紙の展覧会「シャルメ美術館トリエンナーレ」でも、初出品、アジア人初、切り絵部門初の最優秀賞を受賞。ヨーロッパやアメリカの美術館でも出展依頼が相次ぎ、私の切り絵はあつという間に世界に広がり、世界中で出版され美術館にも所蔵されているアートカタログ十五冊に記載されました。二〇一二年元旦に日本に帰国。フランスに在住していた頃から切り絵のお教室は日本中で開催し、一万人以上に受講いただきました。今は生徒の皆様と、東京都美術館や国立新美術館で毎年展覧会をする催事を行っています。今、モンサンミッシェルでの展示も企画中です。一つ一つを積み重ね、それが足場となって、立派なお城が建つのだなあと、二十年切り絵をして実感しております。私は三十歳でアートなど何も分からずに始めました。ただただ「好き」「無我夢中」というのが自分を支えてきたのだと思います。今年はオリンピックのお仕事を頂いており、弟子と生徒さん達と大作を五点作ることにしています。私と一緒に過ごして下さっている皆様「切り絵をしていてよかったです！」と思いいに残るよう、私も最大の努力を惜しまず、これからも人生と一緒に謳歌していこうと思っております。



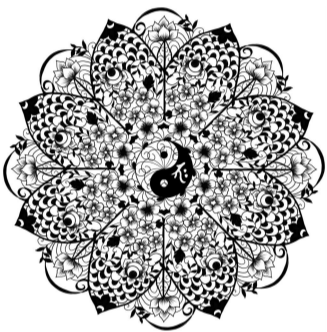
お檀家紹介

レース切り絵作家

蒼山日菜様

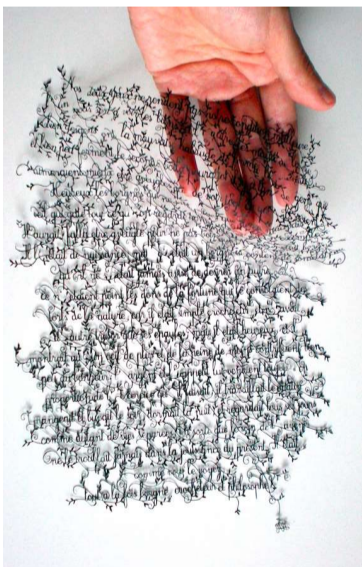
米誌ニューズウィーク「世界が尊敬する日本人一〇〇人」に選出、世界中の美術館に作品が展示され、ブラジル・イギリス・ウクライナの教科書に切り絵が起用されるなど、現在も精力的に活躍されている蒼山日菜様は、お檀家のお一人で、昨年末にお母様の第七回忌法要をお済ませになりました。

蒼山日菜様とは、平成二十六年十二月にお母様が逝去されてからの縁で、平成二十七年九月十九日〜二十三日まで、たちばな会館で個展を開かれ、日蓮宗とのご縁が深まり、同年に身延山の富士川クラブパーク内にある「切り絵の森美術館」で個展を開催された際、法主猊下と面会されたことがあったそうです。昨年、蒼山日菜様がお弟子さんと身延山久遠寺に参拝される事を知り、法



この作品は、中心にお釈迦様の梵字を置き、日蓮聖人の「蓮」の周囲に、身延山の桜と、仏教の守り神である龍の鱗をあしらひ、森羅万象に反時計回りに回る曼荼羅が表現されており、曼荼羅の右下の蝶(上の写真の額内)は、仏の使いとも言われ、大変神秘的な作品です。

蒼山日菜様から「レース切り絵の世界」と題する文章をお預かりしましたので、紹介させていただきます。



五人に一人という確率で入選出来るこの展覧会で、お客様達から多大な

たちばな会館にて、また展示などもさせていただければと住職さまに懇願させていただきました。お檀家の皆様にもこのレース切り絵の世界、楽しさを共有できたらと存じます。